歩　く

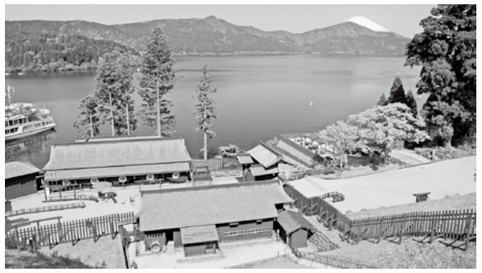
箱根町の小学校では、わらじを作って石畳を歩く授業を行っています。先人たちの築いた道を往時の履物で歩く箱根町ならではの授業です。

箱根八里の魅力は江戸時代の景色をそこに見ることができる資産がたくさん残っていること、また歩くことで江戸時代の人や物の往来がいかに険しいものであったかを知ることのできることだと思います。

今の舗装された道は歩きやすく、とても便利です。それと比べると石畳は歩きにくいものです。

ただ、いまひと時だけは江戸時代へ思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

箱根町には美しい自然だけでなく、歴史的な魅力もたくさんあります。みんなで守っていきたいですね。



東海道を通行する旅人を監視した箱根関所は、全国四大関所のひとつとして旅人に怖れられ、特に江戸から西国へ向かう「出女」の取り締りは厳重を極めました。享保14年（1729年）、そんな関所を何と象が通っていきました。好奇心の強かった時の将軍徳川吉宗に献上するため、遠く長崎からやってきた象は、箱根山の余りの険しさに一時ダウン。しかし、必死の介抱で何とか復活し、この厳しい箱根関所を通過していったのです。

箱根の山々に囲まれ、彼方に富士を望む明鏡、芦ノ湖。そのほとりには、遠く奈良時代に創建され、箱根の山々を祀る箱根神社が建っています。その美しい姿は、険しい山路を上りつづけた旅人たちをどれほど慰めたことでしょう。湖畔の東海道脇に鳥居が建ち、箱根神社へ向かう参詣道が続きます。多くの旅人たちは、旅の途中、この道を通って箱根神社へお参りしたといいます。

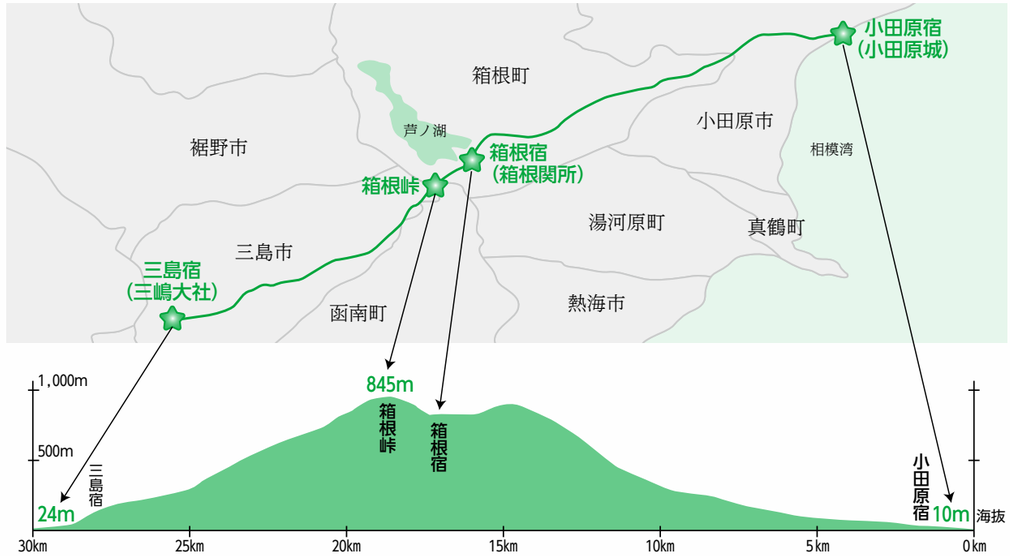
箱根八里とは

東海道で小田原宿から箱根宿までの四里（約16km）と箱根宿から三島宿までの四里（約16km）を指しています。

この宿（しゅく）とは宿場町のことで、街道を移動する旅人のために江戸時代に整備された宿泊が出来る場所です。また宿には役割もあり公用の荷物を次の宿へ運んだり、旅に必要な馬を用意しなければなりません。宿駅伝馬制度などと言います。宿と宿の間には「間（あい）の村（むら）」と呼ばれる村々がありました。宿も間の村も街道沿いに家が立ち並ぶ街並みをしています。

私たちの住む場所にも人間と同じようにいろいろな生い立ちがあります。皆さんの住む・働く場所がどのような生い立ちなのか、そんなことを調べてみるのもとても面白いですよ。

さて江戸の大動脈である東海道、その中で最大の難所とされていた箱根八里。その所以（ゆえん）は、険しい山道という肉体的な面と、登り切った後に関所での取り調べがあるという精神的な面の厳しさにあったようです。



現在でも箱根を代表するみやげの一つに挙げられる寄木細工。自然の木の色を活かしたこの美しい幾何学模様の表面装飾に彩られた木工品が、畑宿をはじめとするここ箱根山で作られるようになったのは江戸時代後期のころからです。そして、街道を行く旅人や、温泉場を訪れた湯治客の土産物として人気が高まりました。きっと、美に対する感性は江戸時代も現代も同じですね。

険しいうえに、脛まで泥につかる悪路だった箱根八里。そのため最初は竹を敷いて対応していましたが、あいにく竹は腐ってしまうため毎年敷き替える必要があり、その財政的・肉体的負担は大きかったようです。そこで登場したのが、当時最高の舗装技術である石畳。石畳が敷かれたのは延宝８年（1680）のことで、現在でもなお、箱根八里の各所に石畳が残り、江戸時代の風情を伝えています。